

地域で子どもと本をつなぐ

子ども読書活動交流集会

(地域・家庭文庫編)

発表者：柴田 啓子
 (NPO 法人子どもとおはなしの家・深谷市)
 塩谷 智紗子
 (文教大学あいのみ文庫・越谷市)

発表 1 「子どもとおはなしの家」
 —この一年を振り返って—

柴田啓子氏
 (NPO法人子どもとおはなしの家)

1 NPO法人子どもとおはなしの家

(1) NPO法人子どもとおはなしの家とは
 放課後児童クラブの運営を中心に、交流事業や子どもの本の学習会、講師の派遣等を行っている。2008年9月、深谷市に開設した。

(2) 開設準備

平成19年9月NPO設立準備を始めた。設立申請、設立認証、設立登記、不動産の購入と一年間に渡って準備した。

2 運営スタッフ構成

◇ 理事会

A 小学校よみかせグループ所属

B 図書館司書資格あり、学童経験あり、
よみかせグループ所属

C 保育者資格あり、よみかせグループ所属

D 小学校よみかせグループ所属、

ヨーガ指導者

E 図書館ボランティア代表、パソコン指導者

◇ 児童クラブ

A 保育資格取得中、よみかせグループ所属

B 学校図書館勤務経験者、介護資格あり

◇ 監 査

人事教育研修者

合計 8人

3 こどもとおはなしの家での活動

(1) 利用している子どもの人数

	1年	2年	3年	4年	合計
2008.9	1	1			2
2009.4	9	10	1	1	21
2009.9	8	8	1		17

(2) 予 算

◇収入 会費 (大人 3,000 円/年)・クラブ
 費 (子ども 12,000 円/月)

助成金 (日本財団、伊藤忠、こども
 ゆめ基金、こども未来財団)

◇支出 人件費、不動産の購入、修繕費、図
 書費、体験学習・講座費用等

(3) 主な活動

・「子どもとおはなしの家」の一日

学校から帰ってきて、放課後 6:00 までこ
 どもたちは、「子どもとおはなしの家」で
 過ごします。

3 : 3 0 ~ 自由に遊ぶ。絵本やおはなし

4 : 0 0 ~ おやつ (校庭や公園へ行く)

5 : 0 0 ~ 宿題・帰りの用意

6 : 0 0 お迎え

夏・冬・春休み 8 : 3 0 ~ 6 : 0 0

一日出かけて体験学習・料理。

長い読み物を読んでもらう。

・この一年の活動

おはなし会・ヨーガ教室 (月 1 回)

交流を兼ねて親子で畑作り

(ジャガイモ、ナス、ゴーヤ)

体験学習 伝承文化体験活動 (2009)

2010 年は農業体験を予定。

(4) PR 活動

・パンフレット、イベントポスター・チラシ
 の作成

・ブログの開設

<http://blog.canpan.info/ohanashinoie/>

・市の広報・新聞への掲載

・小・中学校・保育園・図書館・公共施設・
近隣学童へPR

(5) 今後の活動

2010年度は農業体験(麦の種まきから、うどん作りまで)を予定している。イベントばかりでなく、身の丈にあった体験学習をしていきたい。

4 一年目を終えて

視覚からの情報は入っていくが、耳からだけの情報が入っていかない子もいる。視覚情報が多すぎる現在、耳で聞いて、目で聞いて、心で聞いて、想像力を働かせることが大事。絵本のよみ語りやおはなしを聞いて想像力を働かせる時、脳は前頭前野を使うのでα波状態となる。耳を鍛えることが、自己コントロールを身につける子ども時代に、大切なのではないだろうか。五感を使うわらべ歌や昔の遊びを取り入れて、豊かな子ども時代を過ごしてほしい。

今年は一・二年生に一人読みに移行できる本を紹介した。来年は古典の長編を大人が少しずつ読んで紹介したい。

発表2 地域でつなぐ

一子どもに本を手渡す人に向けて一

塩谷智紗子

(文教大学あいのみ文庫・越谷市)

<はじめに>

あいのみ文庫は1982年、文教大学内に開設された。大学の中にある信頼感から他に比べ利用者は多い。しかし10年ぐらい前から、子どもたちの状況に変化が生じた。子どもたちが時間に追われ、文庫に来る事も難しくなった。

反面、今まで関わる事が難しかった保育所や学校に、読み聞かせボランティアが入る

ようになってきた。実際に保育所や学校で読み聞かせを始めてみると、学校図書館に司書配置の必要性を感じ、行政等に要望をした。司書の配置はなかなか進まないが、学校で活動しているボランティアの質を高めることは必要。人と本と子どもが好きだけでは、足りなくなってきた。そこで子どもに本を手渡す人に向けた講座を開きたいと思うようになった。

2006年文部科学大臣賞受賞を機に、大学へ企画書を提出し、大学の予算で講座ができるようになった。

1 子どもをもつ親に手渡す

～幼児をもつ親のための講座～わくわく絵本教室

赤ちゃんとお母さんを見ていると、お母さんの接し方に、距離感がある。絵本に出会う前にもっと親子のスキンシップが大切なのではないかと思う。若いお母さんが文庫に絵本だけでなく、子育てのヒントを求めている。地域で文庫活動をする私たちができる子育て支援の一つでもある。

2 ボランティアに手渡す

図書ボランティアのための講座

～本物の読み手を育てるために～

子どもたちに本を手渡す意味を共に学ぶ。選書は大切である。子どもたちが出会う本が、生涯の一冊になるかもしれない。誠実に対応してほしい。

保育所・学校・図書館・地域ボランティアなど、子どもと本に関わる人達とのパネルディスカッションを行った。そこでの話し合いはとても有意義だった。

3 学校・図書館・ボランティアをつなぐ

図書ボランティア交流会

越谷市は市内に45校の小中学校があり、市が主催する交流会はどうしても人数に制限ができてしまう。そこでPTA連合会をとおしてお知らせをし、それぞれの立場から発言してもらええる場を設けた。

4 おはなしファラダ

大人のための勉強会。ストーリーテリングの勉強会だが、絵本の読み聞かせでも可。おはなしや絵本ときちんと向き合うことはもちろんだが、まず大人たちが楽しいと感じることが大切。



<質疑・意見交換>

Q パネルディスカッションは、ボランティア、学校、図書館など、それぞれの立場や状況が違うと思うが、開催するのは大変ではないか？それでも必要か？

A 保育所→学校などと、切れることなく子どもの読書環境をつなぐことは大切。まとめ役は大変だが、気づいた人の責任で声を上げる。自分たちがやっていて、楽しいか楽しくないかも選択基準の一つ。

・狭山市では初めて子どもの本とかかわる人たちの交流会を開催した。それぞれの立場で温度差はあるが、今後も続けていきたい。

Q 後継者はどう育てればいいのか？

A 様々な事情でいったん文庫活動から離れていく人も多いが、10年経って戻ってきてくれる人もいる。常にアンテナをはって、声をかけている。

(参加者より)

・子どもを連れて通っていたら、スタッフに勧誘された。まだまだ子育て中だけど、無理のない程度に細く長く続けて行きたいと思っている。

Q 公民館図書室で読み聞かせをしたら、多くの子どもたちが集まってくれた。今後も月一回開催したいが、公民館活動ではないということで許可してもらえなかった。どうしたら認めてもらえるか？

A 文書にして要望すると効果的。

*その他

・一人で家庭文庫を続けている。
・朗読グループだが、教育委員会の依頼で小学校に読み聞かせに行っている。

<資料展示>

協力：浦和子どもの本連絡会、おおば文庫（蓮田市）、くれよん文庫（さいたま市）、こどもとおはなしの家（深谷市）、さくらんぼ文庫（熊谷市）、あいのみ文庫（越谷市）、狭山市地域文庫連絡会